

# 子どもの想いや願いが生きる鑑賞活動

宮崎 俊英

## はじめに

我が国の美術館教育、特に子どもを対象にした教育活動は1970年代後半から北海道立近代美術館の「子どもと親の美術館」<sup>(1)</sup>をはじめとして、美術館の設立とともに各館で取組まれるようになり、1992年の二つの美術館教育に関するシンポジウム<sup>(2)</sup>を機に一層の高まりを見せている。公立、私立ともに各美術館では、子ども向けの企画展、ワークショップ、セルフ・ガイドの制作、ギャラリー・トークをはじめ何らかの子ども向けの教育普及活動を行っている。

一方図画工作・美術の授業では、新しい教育課程を受けて、これまで以上に鑑賞が重視され、制作の導入としての鑑賞や制作後互いの作品を見合うという鑑賞だけでなく、鑑賞のみを扱った授業として年間計画に組み込まれ、多くの新しい実践が行われている。<sup>(3)</sup>また、平成9年度から採用される中学美術の教科書1年生用には全44ページ中4ページを鑑賞に割いている。ここには見開きで「美術館にいこう」と題して利用を呼びかけ、教育普及活動についても取り上げられている。<sup>(4)</sup>このことから、今後美術館を利用した鑑賞学習が更に多くなることが予想される。

当館ではこのような状況にあって、平成5年の開館以来、すべての学校団体に対するオリエンテーション<sup>(5)</sup>を含む鑑賞会を行い、各企画展では、子ども向け鑑賞補助資料を作成し、鑑賞会を行ってきた。また平成7年には、企画展「子どものための美術展'95 美術の光・光の美術」を開催した。特に鑑賞会に重点を置き、会期中8月の夏休み期間には毎日、9月は毎土日に鑑賞会を行い、平日は学校の団体に鑑賞会を行った。<sup>(6)</sup>

この展覧会によって、子ども向けの企画展の可能性、方向性を探ることができたが、当館の教育普及担当学芸員宮下東子は、「現在当館での鑑賞教育は、学校の団体観覧の際

の鑑賞会と企画展の鑑賞資料の制作、配布が主な活動となっている。しかし、鑑賞教育は継続していくことが必要であり、このことと地方公立美術館の役割とを併せて考えれば、教育普及展を継続して開催していくことや、企画展だけでなく常設展の鑑賞資料の作成がより重要なことがわかる。そして鑑賞資料や鑑賞パネルもよいが、何よりも子どもたちに直接に接しながら鑑賞教育を進めていくことの重要性を痛感する。」と、展覧会を振り返り、鑑賞会（ギャラリー・トーク）を中心にした鑑賞活動を充実させることの必要性を提起した。<sup>(7)</sup>



図1

また、この展覧会では、鑑賞会の在り方を探るためにこれを公開し、その後シンポジウムを行った。その中で上越教育大学の西野範夫は、「子どものための美術展」が子ども中心に構成されていることを評価しながらも、展覧会図録および会場の案内パネルの二人のキャラクターによる対話<sup>(8)</sup>(図1)が、「子どもたちの見方、感じ方を方向づけることにつながってはいないか。大人の見方、感じ方に導こうとしてはいないか。大人の価値を押しつけていないか」と問題提起し、「こ

## 註

- (1) 現在では、A★MUSE★LANDとして毎年冬に行われている。
- (2) 街から美術館へ美術館から街へ  
日本・ドイツ美術館教育シンポジウムと行動1992  
期間 1992年5月3日(日)～9日(土)  
主催 東京ドイツ文化センター、全国美術館会議、日本ドイツ美術館教育交流実行委員会  
内容は、報告書(日本文教出版)を参照されたい。  
DOME4号(1992 日本文教出版)にもまとめられている。  
美術館教育普及国際シンポジウム「市民と美術館」  
期間 1992年6月28日(日)～30日(火)  
主催 美術館教育普及国際シンポジウム実行委員会、美術館

連絡協議会、横浜美術館、横浜市、読売新聞社

内容は、報告書を参照されたい。DOME6号(1993日本文教出版)にもまとめられている。

- (3) 新潟県内でも、小学校では、梅沢 崇(上越教育大学附属小学校)の「ぼくらが選んだ上越の芸術家」の実践第5次教育課程研究「12年間の学びの創造」研究会要項1995  
中学では、堀川文章(上越市立城西中学校)の、作品を観察・分析・解釈する「鑑賞の方法を身につける授業」の実践、菲澤 均(上越教育大学附属中学校)の「コンピュータを使った鑑賞の授業」(第9回上越美術教育研究会研究紀要1991)など数多くの実践が行われている。  
その他、中学校美術指導資料 指導計画の作成と学習指導の工夫 186～193頁(1991文部省)、美術2・3 教師用指導書・研究編82～87

う感じるんだよ」という大人の指図によって、子どもの感性が閉ざされる状況に追い込む危険性を指摘した。

美術館教育に携わる者がこれまで一つの理想の姿としてきた欧米の美術館で見られる「作品の前に子どもたちが座り、学芸員の話の聞いている」姿や「子どもたちが手に鑑賞資料を持ち作品と向かい合う」姿は、日本の美術館においても現実のものとなった。確かに子どもたちの反応やアンケートを見る限りでは、見るのが楽しくなったという好ましい反応が返ってくる。しかし、鑑賞資料の問いに答え、呼びかけに従って活動したり、記入したりすることで満足してしまったり、鑑賞会での発言が一部の子どもに偏り、発言をせずに人の意見を聞くことで満足してしまう子どもがいることを見逃してはならないだろう。資料を見ながらの鑑賞や学芸員との対話による鑑賞は、子どもたちにとって新しい経験であり、その効果を否定する訳ではない。しかし、わずかであるが「絵を見るのがつまらなくなった」という子どもたちも存在する。このように、現在行われている美術館教育は、西野の指摘の通り子どもたちの感性を閉じる方向に向かう危険性ははらんでいるのである。

### 求める子ども像

私たちが美術館で求める生き生きと作品と向かい合う子ども像とはどのようなものだろうか。作品の鑑賞後の感想文にそれを見ることができる。

てんしとあくまのえがすごかったです。てんびんで、よいこととわるいことをはかかっていて、てんしが、フォークみたいなものであくまをおいはらっているところが、こわかったです。

わたしは、いいことをいっぱいしようとおもいます。マリアさまは、やさしいかおでした。わたしもマリアさまみたいな人になりたいです。

長岡市立川崎東小学校 1年 T, A

1年生なりに作品から主題を見つけ出し、自分がこうなりたいという願いを持っている。

### 「気に入った作品」

ぼくが一番気に入った作品は、蠟型ちゅう銅置物瑞鳥という作品でした。

ぼくは、あれを見たときまず一番に思ったのは、作ってみたいと思いました。今、すでにどうゆう材料で、どうゆう形で、すこしオリジナルに作る、とか、そういうことは決めてあります。ぜひ材料と時間があればすぐに作ってみたいと思っています。ぼくがあの作品を気に入った理由は、はねあがったどう体、足の曲がり方、羽の模様、などです。ぼくは芸術はよくわかりませんが、あの作品の価値ならわかるような気がしました。もっともあの作品のいい点を見つけてあの作品に近い作品をぼくがこの手でつくってみたいと思いました。

長岡市立上組小学校 6年 N, T

分析的な見方をし、見ることから作ることへ意欲の変容が見られる。作品を見て、自分はこう思うという自分なりの評価をしている。

### わかったような気がする

どちらかという、図工とかは、きらいだった私。でもT・ルソーの「ボートに乗る人のいる夏の風景」を見て、こう、何か引きつけられるものがあった。それは、よくわからないのだけれど、やっとなんかをつかんだのだと思う。図工とかは好きでなかった私。絵をかいたり、版画をしたりするのが「好きじゃなかった」私。でも、このたった一枚の絵で心が変わった。「キライ」だった絵が「好き」に近づいた気がする。絵で心が動かされたのは初めてだ。絵を見ても、「キレイ」としか思わなかったのが、こんな、「何か伝わってくる。」というのは、何か、うれしい。ハイビジョン<sup>(9)</sup>を見たとき、同じ所をかいたのに色のつけ方、感じ方がちがうのは「すごい」と思った。絵はその通りのことをかかなくても、自分が思った通りにやればいいんだ、と思った。でも、その通りにかくのも大切だ

頁(日本文教出版1993)、教育美術No.12特集子どもの鑑賞(教育美術振興会1996)にも鑑賞授業の実践が掲載されている。

(4)日本文教出版平成9年度用教科書美術1

2・3上では36~43頁、2・3下では32~43頁

(5)館のエントランスホール、または講堂で、あいさつ、自己紹介の後、美術館の役割、鑑賞のマナーを話し、引率教師は、諸注意などの連絡を行う。

(6)会期中の団体来館数は、46校、2184人、児童生徒観覧券(観覧料が免除)で個別に来館2371人

平成6年度の学校団体の来館者数は、121校9406人引率教師410人(学校団体とは小・中・高等学校)

なお、全来館者数は76195人(企画展、常設展合計)

(7)新潟県立近代美術館研究紀要'95「子どもの感性を育てる鑑賞教育 子どものための美術展'95」より1995 54頁

(8)ヒカリ先生、ライト君の二人が会話をしながら展覧会を見ていくという想定で、「特定の見方を押しつけたり、作家や技法に関する知識を教えこむものではなく、作品を鑑賞するための手がかりを示したもの」として図録に会話を載せ、会場には、パネルを展示した。(パネルの会話文は、当館で一部修正した。)

(9)当館のハイビジョンギャラリーの番組「モネの連作 ルーアン大聖堂」のことであると思われる。

絵をみるのは、とてもおもしろいと思う。それがやっと県立近代美術館でわかったような気がする。

長岡市立上組小学校 6年 Y, M

絵との出会いを素直な気持ちで表している。また、写実的に描く、思い通りに描くという二つの描き方のどちらも大事にしようとしている。何より絵を見る楽しさを知った喜びにあふれている。

私たちが美術館で育てたい子どもたちは、この三人のように自分なりの見方で、作品を見、一人一人がそれぞれに違った美しさを発見し、見る楽しさを味わい、それが他の作品の鑑賞や表現につながっていく子どもたちである。そして作品に対して、自分なりの思いや願いがもてた時に、子どもたちは生き生きと作品と向かい合っているのである。このような子どもたちが大人になった時が、子どもから大人まで、すべての人たちによって真の鑑賞が行われる時ではないか。ではこれまでの美術館での鑑賞活動をどのように見直せばよいのだろうか。

### 子どもと美術館

現在の教育課程は、社会の変化に対応できる心豊かな人間の育成を図ることを基本的なねらいとし、心豊かな人間の育成、自己教育力の育成、文化と伝統の尊重と国際理解の推進という方針により改訂された。子どもたちがあらゆる機会において認められ、一人一人が生きがいをもって一日一日を生きていくことを根底に、子どもたちを中心に改訂された。これを受けて、各学校では、具体的な取組として学校週5日制の導入、開かれた学校の創造、学校間、学校と地域の連携などが進められている。これらは、子どもは、学校、身の回りの自然、社会、文化などとの関わり、遊びを含め、日々の生活のあらゆる場面で学び続けている存在であり、学校、家庭、地域社会のあらゆる場面で、子どもたちを生かしていこうとする考えに基づいている。学びの場を、学校、教室、学年、教科とか45分間といった狭い枠組みの中ではなく、子ど

もたちが日々生きている様々な場所、あらゆる機会と捉え、その中で、自分の生き方を学んでいく総合的な教育を目指している。したがって、美術館も子どもたちの学びの場の一つとなることが期待されている。しかし、これまで美術館では大人が主役であり、子どもたちは脇役として捉えられてきた。例えば、作品の展示の高さ、キャプションの文字などは大人仕様であり、また、大人の鑑賞の妨げにならない静かな鑑賞が望まれる中で、ギャラリー・トークが、大人の邪魔にならないように、隙間をぬって行われてはいなかったか。同様にセルフ・ガイドも動的な活動を内容に盛り込みにくかったのではないか。今、子どもを大人と同様美術館の主役にしたい。そのために、子どもをとらえ直し、子どもを中心とした鑑賞活動を構想しなければならない。

### 新しい子ども観への転換と美術館での学び

西野範夫は、「これまでの教育では、社会や文化の発達による知識や情報、技能など増大するこれらのものを、すべて子どもたちに与えなければ子どもたちは生きていけないと考え、それらを一方的に教え込むというやり方をしてきた。そして、本来ならば、子どもたちが、当然、自分で考えて判断し、理解し、納得したりして、自分の新しい学び方、生き方に生かせるような知識や技能として獲得できるようなことまでも、一方的に教えてしまったというのがいままでの教育であった。」と反省を促し、「子どもたちは、本来、自分で生きていくことができる。いろいろなよさをもっていて、自分で考えて、自分でやってみて、自分で判断して生きていくことができる有能性、可能性をもっている存在である。」と子ども観の転換を述べ、子どもたちのよさや有能性を次のようにまとめている。  
1、ものごとにするで関わる。2、課題や問題を発見できる。3、課題や問題を自分で解決しようとする。4、経験を生かして試みたり考えたりする。<sup>(10)</sup>

このような子どものよさや有能性が現れた姿を小学校6年生の次のような鑑賞活動にみることができる。

横山操の「高速四号線」(図2)の前に立った子どもたちは「あっ阪神大震災の絵だ。」と声を出した。しかし、作者がすでに亡くなっていることを知っていた子どもたちは、ではいつ

(10) 上越教育大学附属小学校研究協議会基調講演1995.5.24  
教育創造第120号6~15頁および「子どもたちがつくる学校と教育」美育文化1996NO.4~1997 NO.2を参照した。

たい何を描いたのだろうか」と疑問を持ち、制作年を確認した。しばらく考えていた子どもたちは、オリンピックの年だということに気が付き始め、「そうか、壊れたのではなくて、作っているんだ」という発言をした。この場にいた展覧会の担当者は、この作品についてどう話そうかと考えているうちに、子どもたちがこのように会話を膨らませながら気付いていったと言う。

子どもたちは、このように進んで作品を見、疑問を解決し、学ぼうとしている。



図2 「高速四号線」1944年

現在の美術館教育は、知識を教え込むのではなく、まず作品に近づく、鑑賞を楽しむという方向で進められている。しかし、このような目的で行っている様々な取組も「させる」という大人の側からのアプローチでは、子どもたちのよさや有能性を積極的に生かすことはできず、その結果作品に「出会わせられ」、「楽しませられ」ている。子どもを美術館の主役とし、一人一人のよさや有能性を生かした鑑賞活動を行うために次の2点から鑑賞活動を構想する

### 1、体験的な活動を取り入れる。

視覚だけではなく、五感をはたらかせた総合的な鑑賞活動を行う。「見る」だけでなく「触れる、持つ」などの五感をはたらかせたり、描かれている場面や彫刻のポーズなどを「演じる＝動作化する」体験などの多様な鑑賞活動を行う。作品の保護のため、作品に触れたり、持ったりすることには制限があるが、効果が期待できる作品を特定し、可能な限りその範囲を広げていくことが必要である。また「演じる」ことによって、からだ全体で作品と関わり、鑑賞者、作者、モデルなどそれぞれの立場から作品をとらえ直して見ることができる。

例えば、ケーテ・コルヴィッツの「農民戦争 戦場」(1922~23)図3は、母親が昼間の戦いが終わった夜の戦場で深く腰を曲げ、累々と横たわる死体の顔に光を当てながら、我が子を探す光景を描いた版画である。大人ならばすぐに戦争の悲惨さ、母親の愛情というこの作品の主題に行き着くが、子どもたちにとって、戦争は大人から与えられた情報として知っているにすぎない。そこで、この作品の前で、子どもたちは目をつぶって横になり、一人が母親役となった。次に「暗い夜」、「死体が横たわる」、「息子はどこに」と作品に描かれている状況を語って聞かせた。その後子どもたちから「怖い」、「お母さんは強い」、「息子が見つかるということは、死んでしまったということだ」、「見つからなければいい」など次々と感想を聞くことができた。「見つからなければいいというのはどうして」と聞くと、「だって見つからないということは、生きていてことだよ。」というつぶやきが返ってきた。そのとたん子どもたちの表情は、ふっと明るく輝いた。小さな暗い画面の版画であるため、表面的な見方になりがちであるが、描かれた場面を演じることによって、母親の心情に迫ることができ、作品の主題をからだ全体でとらえることができた。(11)

また、前田青邨「被物」(図4)の画面上部には、主従関係の主の象徴として太陽が描かれているが、これは子どもにはわかりにくいものである。そこで、筆者が武士の役となり、膝をつき、頭を下げたポーズをとった。これにより反対にいるべき描かれていない主君の存在を強く意識し、本来そこにいるべき主君として一人の子どもが前に立つことになった。子どもたちは、そこにいるべき人物が描かれていない理由を長い間考えていたが、一人二人と描かれている太陽との関連に気付いていった。(図5)



図3

(11) 「農民戦争」を扱った鑑賞の例として、児童心理学者ロバート・コールズの小学校4年生の授業実践がある。「農民戦争」を見ることで「文化や人種の問題へと発展」し、クラスに「沈黙と思索と内省という、まれにみる現象が起こった」という。アートニュース日本版2号同期会出版1994 59頁



図4



図5

この二つの例のように視覚だけでなく他の感覚を総合的にはたらかせてからだ全体で見ることによって、作品との深い関わりが生まれ、子どもたちの中に豊かなイメージが形成されていく。

## 2. 鑑賞の過程を重視する。

これまで、教育の場では、学習を知識の伝達と考え、学んだ結果を重視してきた。しかし学びの過程である意志決定、学習計画、学習活動、自己評価のそれぞれに子どもが主体的に関わることで、学びがより深まり、確かなものとなる。多くの研究、授業実践によって明らかにされている。鑑賞も同様に、作品を構成する様々な要素(主題、歴史的背景、技法等)を理解したという結果ではなく、そこに至る過程が重要である。作品との出会いから始まる、鑑賞の始まりの段階において、子どもが自分から関わりをもつようにすることである。先の「高速四号線」の例では、阪神大震災の強いイメージが、子どもたちと作品を強く結びつけた。これは、子どもたちの間違いであった。しかし制作年を知ることでこの間違いに気づき、学校で学習したオリンピックの年と結びつけることで高度経済成長という時代背景との関連にまでつなげていった。このように自分で課題や疑問を見つけること、それが自分たちの力で本当にわかったという過程を経ることが、見ることの楽しさ、自信につながる。

また、これまでは鑑賞資料の制作やギャラリー・トークの構想時に、感性を大切に、知識に偏らないようにとか知識の伝達にならないようにといわれてきた。しかし、子どもは、大人が与えずとも作品から課題や問題を発見し、解決し、学んでいく。自分なりの学び方で知識を見つけだしたり、作り上げたりしていく。例えば、エルミタージュ美術館展の西洋画部門に3点の聖母子像が展示された。子どもたちは、まず、クラナッハの「林檎の木の下の聖母子」(1520年代末)(図6)を見た。ここでは、子どもたちからの質問に答えながら聖母子像について簡単に説明した。その後会場を見回した子どもたちは、他にも2点聖母像(図7、8)があることを見つけ、3点を比較することで共通点、相違点を見つけだしていった。そして、聖母マリアとキリストの視線の方向や抱かれ方の違いから、各聖母子像が描かれた時代背景、作者の制作意図にまで気付くようになっていった。



図6 ルーカス・クラナッハ  
『林檎の木の下の聖母子』  
1520年代末  
油彩・カンヴァス



図7 ノルマ・イル・ヴェッキオ  
『聖母子』  
1520年頃  
油彩・カンヴァス



図8 フランソワ・ルモワーズ  
『聖母子』  
1720年代中葉  
油彩・カンヴァス

このように作品と自分なりに関わりながら、感じ、知ることができた子どもたちは、自分なりの見方、問題解決の仕方を他の作品にも当てはめてみようとする。制作年を知ることで描かれている内容を推測できるということを学んだ子どもたちは、次からは、キャプションに書かれている制作年に注意するようになる。聖母子像を知った子どもたちは、別の展覧会で聖母子像を見つけ、自分なりに制作年代を予想することができるのである。

また、自分の見方、感じ方、考えたことを誰かに話すことで、考えをまとめる、練り上げることができる。友達のことを聞くことで、自分の意見を修正したり、自分の見方に自信を深めたりする。このように他から認められることでさらに意欲を高め、自分の見方に自信を深めていく。子どもの鑑賞の過程

では、一つの作品で終わることなく次の作品との関連や子どもたちの交流が組み合わされていくことも重要である。

### 鑑賞活動における支援と共感

このように体験的な活動を取り入れ、過程を重視した鑑賞活動の中で、私たちは、どのような役割をはたせばよいのだろうか。子どもが進んで作品を見て、自分で課題を見つけ、取組んでみたけれど自分で感じた、わかったというまでに至らなかったということも予想される。しかし、それではまた何かに頼った鑑賞にもどってしまうだろう。東洋(あずまひろし)は、「学び手がイニシアチブをもつと言うのは、学び手がひとりだけで、助言や指導を排除して学ぶことではない。」と述べ、「子どもの志をまげない、子どもが自分でやれる、またはやりたいと思うところにまで立ち入らない、そして、自分でやれたという喜びを奪わないような目立たない援助」の必要性を述べている。<sup>(12)</sup>

鑑賞における目立たない援助とは、子どもが作品を見た時のつぶやきを汲み上げ、子どもたちに投げ返すことであり、自分で疑問や課題を見つけるまでの時間を十分に確保することであり、豊富な資料を準備することであり、様々な見方、考え方を交流させるコーディネーター的役割を果たすことだろう。また、自分なりの見方や考え方が見つけられない子どもには、資料の提示や助言をするアドバイザー的な役割も必要である。何より子どもの素直な疑問や言葉にうなずき、共に考えたり、美しさの秘密に驚いたりする共感者であることが大切である。具体的には、現在のギャラリー・トークに見られるような「作品と子どもの間に立つ」のではなく、「子どもの隣」で子どもと同じ目線で作品を見る姿が浮かんでくる。

次に、子どものよさや有能さを生かすセルフ・ガイドやギャラリー・トークとはどのようなものか。そこでは、どのような共感や支援ができるのかを述べる。

### セルフ・ガイド

セルフ・ガイドについて丹青総合研究所の横溝真子は、

「主に博物館や美術館の展示室内などで、問いかけや遊びなどの手法を交えて、来館者に展示テーマや展示物等に興味を喚起させより深く創造的な理解や発見、感動へと導くことを目的として使用される印刷物」と定義し、その特徴について(1)セルフ・ガイドは個人対応のガイドであり各自のペースで利用することができる。(2)他の来館者への影響は小さい。(3)見る行為の可能性を広げる。(4)形態の工夫が可能である。(5)多種のセルフ・ガイドの同時提供もできるとしている。<sup>(13)</sup>

セルフ・ガイドは鑑賞者を想定して事前に制作される印刷物であることから、あらかじめ作品が選ばれ、鑑賞する順路が用意されている。そこでは、子どもたちは自ら作品を選んだり、発見したり、学ぶという能動的な活動を行っていく。また、セルフ・ガイドを使った鑑賞の多くは、個別に行われるため、他との交流によって考えを深めたり、更に疑問を追求していくなど印刷物としての問題と限界が見えてくる。

これからの子ども向けのセルフ・ガイドは、一人一人の発想や見方を大人の見方の中に閉じこめないよう、質問を限定し、興味をもった作品から取りかかることができるもの、鑑賞しながら子どもたち自身(セルフ)が作り上げて行くことができるものとなる。従ってセルフ・ガイドの中に盛り込まれてきた説明や知識の内容は、子どもたちが、自分で調べたいと思った時に利用できるように印刷物、書籍、ハイビジョンデータベースという形で整備しておくことになる。セルフ・ガイドにおける支援とは、子どもが望んだときに、聞いたり、調べたりする多様な活動ができるようにすることである。このようにして作られていくセルフ・ガイドを友達、教師、親、学芸員などが見たり、感想を寄せることが共感的な働きかけとして必要である。

具体的には、作品図版と「これは、何だろう。」「ここでは何が起きているのだろうか」という問いかけにのみに限定し、子どもが発見したり、気付いたことを記入したり、スケッチできるスペースが広く空いていて、自分で何を見、何を感じ、どう考えたかという鑑賞の過程を記録できるものとなる。形状は、綴ってある物よりカード形式が適している。

また、美術館の作品に限らず、子どもたちが学校や生活の中で目にする様々なものを対象として、実物または写真や記事、切り抜きや感想などを加え、鑑賞の記録として作り上げていくことができるならば、子ども一人一人が、マルローの空

(12) 東洋 岩波講座「教育の方法1 学ぶことと教えること」18~19頁

(13) 横溝真子 季刊ミュージアム・データNo.15 1991 1頁

想美術館のような「自分美術館」をもつことができるだろう。このような活動は、展覧会の後の発表会や、学校などを使つての企画展、子どものためのガイドを子どもが作る活動などに発展させていくことができる。

紹介する。

### ギャラリー・トーク

ギャラリー・トークは、以前は作品解説と同義であったが近年では、作品解説と区別して使用されている。具体的には、名古屋市美術館の伊藤優子の報告<sup>(14)</sup>にあるように「作品によってアプローチの方法はさまざまであるが、「本物の美術作品をみる体験」を子ども自身が考えて楽しむことができるように、一方的な作品解説ではなく、自由な対話を生み出すような組立をしている。最初から作品の本質には触れず、まず作品をよく観察させるために、作品をみるポイントを問いかけ、子どもの積極的な発言を引き出す方法を探った。そして、子どもなりに考えさせ、会話を重ねることによって、作品の内容、作者のこと、作品によっては歴史的な背景にまで到達し、加えて新たな発見へ導くことを基本においている。」というのが現在各館で行われている子ども向けギャラリー・トークの姿であると考えてよいだろう。大人を対象にしたギャラリー・トークでは、学芸員（又はボランティア）と鑑賞者との対話に重点が置かれるが、子どもを対象にした「自由な対話」とは、作品と子ども、子どもと子どもの間で交わされる対話となるべきである。このような対話を生み出すための支援は、子どものつぶやきの中から作品を見るポイントを探し、子どもたちに伝えることであり、拡散しがちな意見や考えを方向づけたり、まとめたり、さらに疑問を投げかけたりという、司会者やコーディネーターとしての役割である。子どもの新鮮な見方に驚いたり、うなずいたりするといった共感的な態度も、子どもに自信を与えることにつながる。また、学芸員一人対子どもたちという組合せだけでなく、学芸員二人で行ったり、学芸員と教師で行うなど形態を工夫することにより、子ども一人一人に応じた支援を行うことができる。

次に、具体的にどのような鑑賞活動が構想できるかを当館で行っている学校の団体向けの鑑賞活動の二つの実践例で

(14) 伊藤優子 名古屋市美術館研究紀要第2巻「美術館における鑑賞教育の実践」26～27頁

## 体験的な活動を取り入れた鑑賞活動例

ケーテ・コルヴィッツ《母親と子どもたち》

### 鑑賞活動計画

日時:10月4日 PM2:30~3:30

対象:A小学校 1年 40名

作品名:母親と子どもたち (1924~37年)

作者名:ケーテ・コルヴィッツ (1867~1945年)

場所:常設展示室2

- 目標: 1. 作品から母親の子供に寄せる温かな愛情を感じる。  
 2. 母親が子供を守ろうとするさまざまなことを想像する。  
 3. 作品は、作者の思いを見る人に伝えることができることに気付く。

- 留意点 1. 子供のつぶやきをできるだけくみ上げる。  
 2. 抱くという動作を対比することで、単に抱いているのではなく「守っている」ことに気付くようにする。

前の活動:オリエンテーションの後常設展示室ロビーで「犬とネクタイ」鑑賞

展開

鑑賞の流れ	主な鑑賞活動	メイントーク「」	予想される児童の反応 つぶやき
見方を広げる	・常設展示室2の作品の前に座る。 * 子供のつぶやきをできるだけ他の子供に伝える。		「大きい」 「子供を抱いている」 「二人の子供を抱いている」 「裸だ」 「力が強そう」 「子供は眠っている」 ・母親と子供だと気付く子供がいるだろう。
疑問を持つ	「みんなは赤ちゃんの時どのように抱かれていましたか。」 ・普通に抱いている様子を動作化して見せる。 「なぜこんな抱き方をしているのだろう。」		「こんなふうに抱かれたことはない」 なぜこんな抱き方をするのか疑問に思うだろう
自分なりの考えを持つ	・彫刻の背中側を見せる。 気付くまで少し待つ。		母親の大きな背中に注目する。 「大きな背中、広い背中、丸い背中」  「何かから守っているんだ」
作品に思いをよせる	「おかあさんの背中は大きいね」 「子供たちは、静かに眠っているね」  「どんなおかあさんだと思いますか」 「この彫刻を作った人もおかあさんだったんだよ」		「あらし、こわい人、かみなり…」などたくさん出るだろう。  「戦争」という発言はでてこないだろう。  自分の母親と比べたりして、作品から母の愛情をくみとるだろう。

後の活動:自由鑑賞

作品を見た子どものつぶやきをくみ取り、可能な限り他の子どもに伝えていく。その中から、疑問や発見、他とは異なった見方に基づいた発言をメイントーク(主な問いかけ)として、再び子どもに返すことに心がける。メイントークも子どもの反応も計画時は「予想」であるため、これに縛られることなく、子どものつぶやきによって、柔軟に流れを変えて行かなければならない。そして、トークを固定することなく、回を重ねるごとに修正を加えていくことが重要である。

ここでの支援は、「抱く」という二つのポーズを対比させることである。自分が子どもの頃抱かれたのとは違う抱き方をすることで、このポーズの特殊性に気付き、なぜかと言う疑問が生まれ、作品の見方が深まっていく。同じ作品でも、低学年では、戦争との関連にまで気付くことは困難だが、母親の深い愛情を感じることができる。中学年以上になれば、「戦争」など世の中の悲惨な出来事から子どもたちを守っているのではないかと考えを広げ、小学校6年生では、制作年を知ること、戦争との関連性に確信をもつようになる。(15)

(15)小学校6年生の社会で戦争について学習する。





## 経験の過程を重視した鑑賞活動例

クロード・モネ 《コロンブの平原・霜》

### 鑑賞活動計画

日時：9月6日 AM10:30~11:30

対象：B小学校 5年 35名

作品名：コロンブの平原・霜（1873年）

作者名：クロード・モネ（1840~1926年）

場所：常設展示室2

目標：1. 作品に描かれているものから季節を感じとる。

2. 日の光によって、色の見え方が変化することに気付く。

留意点：1. 子供のつぶやきをできるだけくみ上げる。絵の構成要素を多く見つけだすようにする。

2. この絵が朝の景色か夕方の景色かを議論するが、答えという形で教えることはせず、モネが光の変化に興味をもって描いたということに気付くようにする。

前の活動：オリエンテーションの後、常設展示室2で自由鑑賞展開

鑑賞の流れ	主な鑑賞活動 メイントーク「」	予想される児童の反応 つぶやき
見方を広げる	・常設展示室2の作品の前に集まる。 *子供のつぶやきをできるだけひろい他の子供に伝える。	「きれい」「暗れている」 「どの景色だろう」 「地面が細かく描いてない」 「家がある」 「煙突が見える」 ・1日のいつ描いたのか気になるだろう ・青い部分は何か疑問をもつだろう
疑問を持つ	「この絵を描いた時、太陽はどこにあるでしょうか。」	・家の一方に光が当たっていることに気付くだろう ・青い色の部分が影だということに気付く子もいるだろう。
自分なりの考えを持つ	「では、この絵を描いたのはいつだと思いますか。」 「なぜ、そう思ったのですか。」 *朝派、昼派、夕方派の意見を聞く。	・朝、夕方、昼それぞれに分かれるだろう。 *「コロンブの平原・霜」の「霜」に注目する子もいるだろう。 *昼派が減るだろう。 *朝派、夕方派どちらかにはまともでないだろう。
自分の考えを修正する	「考えが変わった人はいますか。」 「朝の絵、夕方の絵どちらかに意見がまとまりませんか。」 *この作品は、夕方を描いたものだが結論は伝えないで置く。	
作品に思いを寄せる	「みなさんは、朝や夕方に絵を描いたことはありますか。モネさんのように描きたいと思いませんか。」	*自分が見てきた、美しい風景を思いだし、描きたいという意欲を持つだろう。 *モネという作家に興味を持つだろう。

後の活動：バルビゾン派の作品を中心に鑑賞  
ハイビジョンギャラリーの「モネの連作」番組を見る



子どもたちにとっては、親しみ易い風景画であるが、表面的な見方で終わってしまうことが予想された。そこで、子どものつぶやきや疑問の中から光源（太陽）の方向、傾きなどに注目させた。朝か夕方かを描いたことまでは容易にわかったが、さらにそのどちらと考えるか朝派と夕派それぞれに意見を出させた。子どもたちは、何か根拠になるものが描かれていないかと絵の細部に注目するようになり、多くの意見を出したが、どちらかに結論づけることは出来なかった。この鑑賞活動では、最後まで夕方に描いたということは伏せておいた。それは、後で館内のハイビジョンデータベースで調べたり、学校や家で地図を見たりという子どもたちの調べる活動を期待するからである。そのために、調べるためのヒントを話した。

鑑賞の過程に、意見を交流する場を設定することで、一人一人が作品と積極的に関わることが出来た。ここでの支援は、子どもたちの様々な意見を取り上げ、対比したり、まとめたりする司会者の役をすることである。小学校高学年や中学生では、この役を子どもが行うことも十分可能である。

学校団体の場合は、日々の子どもの様子を知っている教師が、子どもの意見を取り上げ、学芸員がそれを話題にするという連携をすることで、支援の効果を高めることができる。このような活動を展示室で行うには、少人数でなければならないが、その場合は、展示室で鑑賞後、場所を移して行うことができるだろう。

なお、この二例のような作品ごとの鑑賞は、単独で行われることは少なく、企画展や他の常設展の作品鑑賞の流れの中でいくつかを組み合わせて行われ、対象の年齢や人数に合わせて内容や形態を計画している。特に、学校には鑑賞計画を提案し、これによって事前打ち合わせを行うことにしている。

## おわりに

以上、子どもを美術館の主役ととらえ、そのよさや有能さを生かすことができる鑑賞活動を日々の実践の中から取りだし、支援と共感による新しい子どもとの関わり方を述べてきた。その中で、セルフ・ガイドの問題点も明らかになった。どのような形で印刷物による子どもの学びには限界があるだろう。これまで、セルフ・ガイド、ギャラリー・トーク、ワークショップを個々でとらえることが多かったが、実践例で述べたような新しい鑑賞会（ギャラリー・トーク）の中で鑑賞の補助資料や記録として使われることでセルフ・ガイドの新たな可能性が見えてくる。これに本稿では触れなかったワーク・ショップを関連させることで、子ども一人一人が中心となった総合的な鑑賞活動が構想できるだろう。

学校における鑑賞教育と美術館における鑑賞教育の相違点は、本物との出会いにある。その出会いの中で作者の存在感を肌で、心で、そして目で感じとる体験的な鑑賞活動を構想していかなければならない。

開館以来4年間行ってきた教育普及活動を振り返ると、子どものために何ができるかを考え、実践した日々であった。事前の予約がなくとも、窓の外から聞こえてくる子どもたちの声を聞くと、入口で出迎えた。しかし、いつのまにか子どもたちから学ぶことを忘れかけていたようである。今、子どもと並んで作品の前に立ち、子どものつぶやきに耳を傾けたい。



チエスタワ・ズベール(V.I.P.)の前で



教育普及担当学芸員と子どもたち